商工業者らの動向と近代一宮の都市形成

岐阜大学　学生会員　○牧野広誉
岐阜大学　　正会員　　出村嘉史

１．はじめに

一宮の市街地の起源は，1727（享保 12）年に真清田神社の門前で成立した三八市と呼ばれた定期市である．明治時代に一宮に鉄道が敷設されるまで，一宮の中心市街地は，門前にこの定期市を有するのみであった．浅野らによる門前町に関する研究[1)]で，一宮の町の構成について，「一宮市の都市施設の配置は明治時代から大正時代・戦前昭和期にかけて真清田神社で はなく三八市を中心に配置された」と整理されているように，一宮は三八市を核に発展した都市であると考えられる．三八市では，1790（寛政 2）年の時点で綿買商人の存在が確認でき，江戸期から綿織物に関連する卸売市場[2)]の性格をもつ市場であった．文政（1818-1830）頃から，一宮周辺の尾西地域では綿織物の生産が盛んで，産地と一宮の間には織物に関する物流が常時発生していた．

一宮における都市の形成は，織物生産に関わる流通基盤に大きく規定されていると考えられ，この視点による整理が必要である．整理するにあたり，大正後期から昭和前期までに尾西地域では綿織物業から毛織物業へ主産業の転換がみられたことは注意すべき点である．本研究では綿織物が主生産の明治時代から大正後期，主生産が毛織物へ移行していく大正後期から昭和初期の２つの時代で分析する．本研究では，一宮周辺の物流に焦点を置いて，一つの近代都市が形成される上で，市場という存在がどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的とする．

2. 綿織物業と流通基盤の整備

明治初期は，一宮周辺の産地で生産された綿織物が三八市で取引されるという流通構造を有し，糸の流通は三八市に出店する洋糸商が担った．洋糸とは，幕末の開港により，英国から流入した外国産機械紡績糸である．洋糸商は横浜の貿易商と直接取引をして洋糸を仕入れていた[3)]．当初，横浜からの洋糸の輸送は海送によるものであったが，1889（明治 22）年に官設鉄道が，1900（明治 33）年に私設鉄道である尾西鉄道（一宮 - 弥富間）が一宮に敷かれると，洋糸商らは舟運から鉄道による運送に切り替えていく．また，燃料となる石炭が四日市港から尾西鉄道を通じて運搬できるようになると，洋糸商を中心とした資産家らは 1895（明治 28）年，尾西地域に原糸を供給する目的で一宮紡績株式会社を設立し，これらは三八市を介する物流を促した[4)]．尾西鉄道は，元々津島の産業のために，四日市港と津島，津島と一宮（官設鉄道の駅）に繋ぐことを目的に敷設されたものだったが，一宮の洋糸商らはこの鉄道を活かし流通を発展させた．これにより三八市は綿織物の集散地として発展し，大正時代には図１に示す様な複数の流通基盤（鉄道・道路および市場）が形成された．これらの基盤形成は，事業者が異なるものの，共通して明治時代に発展した織物産業の物流を効率化させることが主目的にあった．

3. 綿織物業から毛織物業へ

明治後期，尾西地域では手織機による綿織物生産が主であった．一方，静岡県の浜松を中心とした遠州地域では，動力織機の導入による近代工業化が進められていた．生産力の増大より遠州は尾西織物の販路を侵食し始め，尾西地域は市場において不利になっていった．そこで，尾西地域では有力機業家のもと毛織物業への転換が図られていく[5)]．元来，尾西地域の織物業は一部の有力機業家と大部分の中小機業家で構成されており，明治 40 年頃から尾西の有力機業家は毛織物業への転換をみせ，中小機業家らが毛織物業に参加するのは 1921（大正 10）年頃からである．

毛織物業の勃興期，有力機業家の転換には東西問屋の影響が大きい．1907（明治 40）年，有力機業家の中野鶴次郎は丸紅商店（大阪）から毛織物を受注し製織していた[6)]．また，1902（明治 35）年頃，吉川豊助商店（大阪）の出張員植松松蔵は尾西地域において毛糸の販売活動をしていた．有力機業家らは，毛織物勃興期から直接東西問屋と取引を始め，昭和初期にもその直接取引は引き続きみられる．一宮の商人が毛糸を取り扱い始めるのは 1923（大正 12）年頃からで[7)]，資本の少ない中小機業家は一宮の商人を介することで毛糸，毛織物の流通を行うようになる．昭和初期の毛織物の出荷ルートを整理すれば，機業家から直接東西問屋に出荷されるもの（30%），機業家から一宮の商人を介して出荷するもの（70%）である[8)]．

4. 一宮市街地構成の変化

毛織物産業が盛んになる昭和初期において，この産業を支える基盤は，全時代の綿織物産業の時代に建設されてきた都市基盤がその骨格として用いられたが，その一方で，各基盤の位置づけが変化している．

(1) 三八市

毛織物への転換，新たな流通ルートが確立した昭和初期の市場，中心市街地ではその構成に変化が見られる．『明治五 年壬申九月 市場人別帳』及び『昭和五年一月十三日 三八市場張店實測圖』から三八市の変化が

読み取れる．綿・糸類 を商品とした店が 1872（明治 5）年から 1930（昭和 5）年に 60 店から 14 店減少している一方，衣類製品を扱う店 22 店から 48 店に増加している．市場に出店する商店の変遷は，三八市が従来卸売市場として賑わっていたのが小売市場へと変化していったことを示している．市場から卸売業の機能が薄れる昭和初期，1929（昭和 4）年に一宮商工会議所は商店街を設置している．また，1937（昭和 12）年時，市内の中心部に衣服商などの小売商が多いことからも一宮の中心部が卸売業地から小売業地へと転換していったことが伺える．

（2）駅前の問屋街

昭和初期，駅前には買継商や毛糸商の集積がみられる（図２）．一宮市域の買継商は 1921（大正 10）年から急増しておりその多くは毛織物を取り扱っている[9]．これは尾西地域の中小機業家らが毛織物業へ転換するに伴った増加である．毛糸商もこの時期，買継商同様の流れで現れたものと推測する．地方から輸出入される毛糸・毛織物の殆どは一宮駅を通じて発着されており，尾西地域内の主要産地である奥町と一宮市間でも尾西鉄道を通じて毛糸・毛織物の運輸を行っていた．駅前に集積がみられるのは，毛織物の取り扱いにおいて駅前が最も有利であったからと思われる．

（3）市街地周縁の工場

1935（昭和 10）年 9 月 28 日発行の大阪毎日新聞『毛織物工業地としての尾西』の記事では「一宮市は概して染色，整理，撚糸工場及び問屋業者多く，中島郡の起町其他は概して織機工場が多い」とある．毛織物の製造プロセスは順に撚糸，製織，染色整理である．これら製織の前後にある工程が機業地と離れ一宮に立地するのは，一宮市街地が集散地と化していたためと考えられる．毛織物の物流のほとんどが一宮駅を介して行われるため，一宮市街地に立地すれば製織工程を担う尾西地域の全機業家との連携が容易である．

5. まとめ

一宮の都市としての発展の初動期には，三八市を取り巻く物流の効率化を目的とした流通基盤の整備がなされていった．主産業が綿織物業から毛織物業へと移るにつれ，商工業者らは整備された流通基盤をより効率的に用いる動きを始める．三八市のもつ市場機能は駅前に移り，市場機能の延長として，市街地外縁には工場が立地した．そして，市街中心部は消費活動の場として組み替えられ，後に都市計画において焦点が当てられる商店街の礎になっていったものと考えられる．

1 尾越麻美，浅野純一郎：門前町都市の近代都市形成経過 に関する研究，日本建築学会技術報告集，第 19 巻，第 42 号，pp.725-730，2013
2 中村勝：市場の語る近代，そしえて，pp.31，1980
3 一宮市『新編 一宮市史 本文編 下』pp.172，1977
4 一宮市『新編 一宮市史 本文編 下』pp.174，1977
5 尾西市歴史民俗資料館『尾西織物と遠州織物』2003
6 豊島株式会社『豊島その歩み』pp.98，1975
7 墨金次郎『尾州艶屋物語』pp.31，1974
8 佐々木秀賢『毛織工業』pp。187，1936
9 尾西織物同業組合『尾西織物案内』pp. 139　1929

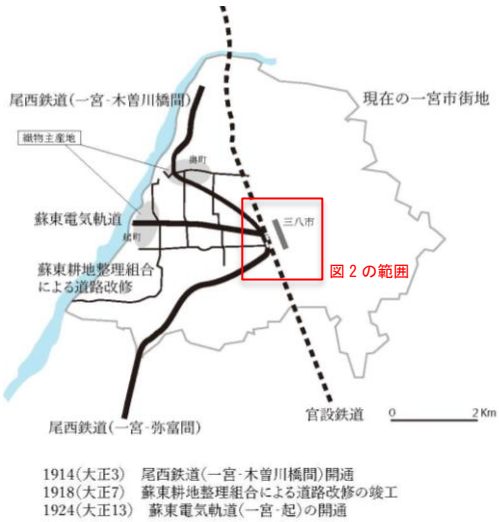

図１　尾西地域に整備された流通基盤

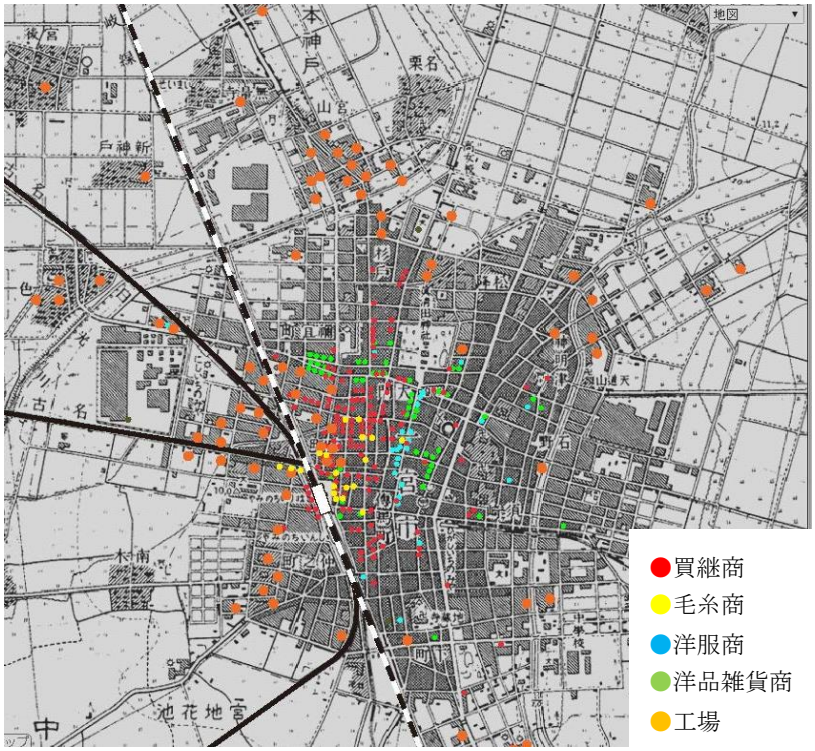

図２　昭和 12 年時の一宮市街地の構造